

第8章 図書館および図書・電子媒体等

1 図書、図書館の整備

図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性（A）

【到達目標】

教育・研究水準の向上に資するため、電子ジャーナルの導入を推進し最新の情報提供を24時間、フリーアクセスで提供すると共に各種のデータベースを導入することにより研究のサポートを図る。また、教育面では有用な図書・学術雑誌・電子化資料等を補充・整備し、医学図書館としての機能を充実させる。

【現状の説明】

開学以来、資料の充実に心掛けてきた結果、図書・雑誌ともかなり充実してきている。また、閲覧室と書庫が一体となっており全館開架方式で運用している。

(1) 単行本

学生用指定図書は、図書館の入り口で最も利用しやすい場所に配架されている。利用しやすいように重要度により、A、B、C群にランク付けされ、学生にとって重要なコーナーとなっている。

図書の内容は、教室からの推薦や教科内容等を参考に毎年見直されている。また、カリキュラムの変更に伴い、PBL テュートリアルコーナーや医学英語コーナーなどを設け、学生の学習に配慮している。

研究用図書は各教員、教室の研究主題に沿った図書が選定されている。

平成12年8月から、「後輩に残す1冊・百選コーナー」を設け、教員からの寄贈図書により、良医になるためにぜひ読んでほしい推薦図書コーナーを開設している。更に、平成18年3月から、「学生生活支援室図書コーナー」を設け、学生生活に直接役立つ書籍等を配架し紹介している。

図書（製品雑誌含む）は表42のとおり、毎年2,655冊（H15-17年平均値）を新規購入している。

(2) 雑誌

洋雑誌の選定は、各教室からの要望と予算に応じ、図書館運営委員会で決定している。医学図書館において雑誌タイトル数の確保は、重要な課題である。平成12～13年頃毎年減少していた図書館購読の洋カレント誌タイトル数も近年は限界に来ており、横這い（H17年326タイトル）状態で推移している。

医学図書館協議会の報告によると、最近10年間で冊子購読タイトル数は半減し、電子ジャーナルに取って代わっているとの報告があり、本館も電子ジャーナル化に向け急速にシフトしている。

本学図書館は、「大学基礎データ調書（表 41）」のとおり約 196 千冊の図書を所蔵し、内外合わせて定期刊行物約 3,650 種類を所蔵し、1,200 種を購入している。

【点検・評価並びに長所と問題点】

和書は、平成 18 年 3 月末現在、単行本約 52 千冊、雑誌約 32 千冊、計約 84 千冊が所蔵されており、私立医科大学平均、全国医科大学（医学部）平均を共に若干下回っている。

一方、洋書は単行本約 37 千冊、雑誌約 83 千冊、計約 120 千冊を所蔵しており、私立医科大学平均、全国医科大学（医学部）平均を共に上回っている。

蔵書総冊数は約 200 千冊で、毎年増加しており、この数は私立医科大学平均、全国医科大学（医学部）平均並みである。これらの傾向は以前と変わっていない。

逐次刊行物種類数では、和雑誌は約 1,400 種、洋雑誌は約 2,200 種が所蔵されており、雑誌種類合計約 3,600 種となる（表 41 のとおり）。

カレント誌は和雑誌 600 種、洋雑誌 598 種、計 1,198 種が購入されており、私立医科大学平均、全国医科大学（医学部）平均より、若干少ない。

図書の選定・収集は教室からのアンケートや推薦に基づき購入されているが、これからも利用者の要望を考慮した図書選定・収集に心掛けていく必要がある。

本館の所蔵構成は洋単行書と洋雑誌の所蔵数が多いのが特徴であり、洋単行書においては私立医科大学（本館）平均の 33%増、全国医科大学平均の 59%増と充実している。

逐次刊行物所蔵種類数は洋雑誌において、私立医科大学平均、全国医科大学（医学部）平均数を共に上回っている点が特筆される。

昨今、雑誌の電子ジャーナル化は急速に進みつつあり、本学も積極的に導入を計画している。

平成 19 年度から約 3 ヶ年計画で段階的に導入し、毎年約 1,000 タイトルの電子化を目標にしている。また、電子ジャーナルを補完するツール（Web of Knowledge）も併せて導入することになり、研究活動の強力なサポートができることは評価したい。

電子ジャーナルの維持管理については、不正アクセス・不正ダウンロード等著作権問題の対応が極めて重要と考えられるので、適切な体制作りが必須である。

【将来の改善、改革に向けた方策】

和・洋雑誌、二次資料の見直しが進められた結果、特に洋雑誌のタイトル数は全国の私立医科大学平均より少なくなってきた。打開策は、電子ジャーナル化であるが、図書館全体の予算を配慮しつつ、本学の研究環境にあった電子ジャーナル化を推進していく。また、当然ながら電子ジャーナルは、24 時間フリーアクセスなので研究環境は大幅に改善される。

電子ジャーナル化は前述のとおり今後約 3 ヶ年計画で段階的に導入する計画であり、また、電子ジャーナルを補完するツール（Web of Knowledge）を 3 年契約で導入することも具体化したので、研究のサポート体制が整った。

学生指定図書や図書館購入の雑誌関係は、毎年各部署へのアンケート調査で希望を聞き

ながら進めている。利用者の意見が反映されるような選書を心がけ、図書館の充実に努めていくことが評価に繋がると考えている。AV資料等ニューメディアの収集にも努力する。

「学生指定図書コーナー」、「PBLコーナー」、「国試コーナー」は教育環境にとって最も重要なコーナーであり、「後輩に残す1冊・百選コーナー」、「学生生活支援室図書コーナー」は、豊かな学園生活を送るための支援コーナーである。これらは本館の特徴付けとして評価でき、引き続き維持していく。

図書館施設の規模、機器・備品の整備状況とその適切性、有効性（A）

（1）建物・施設の整備

【到達目標】

雑誌配架スペースが狭隘化しているが、電子ジャーナル化を推進することにより解決を図りたい。閲覧室の面積は私立医大平均値を確保している。今後、ニューメディア等への対応でスペースが必要となった場合は、2階の開きスペースを有効活用することとしたい。

【現状の説明】

本学図書館は大学キャンパスの中央に位置し、どの部署からも来館しやすい便利な場所にあり、延面積は2,143㎡で、事務室120㎡、閲覧室750㎡、書庫581㎡となっている。

閲覧室はガラス張りで開放感がある。座席数は189席(グループ学習室等含む)で、在籍学生当たりで換算すると4.7人に1席と比較的恵まれている。書架延長は4,991mである。

レファレンス・ルームや整理室等の付帯施設が少なく、カウンターもコンピュータ端末が置かれ手狭な状態にあったが、不要物を廃棄し改善されている。

【点検・評価】

私立医科大学の図書館延面積(分館がある図書館に於いては本館の面積)は平均2,628㎡であるのに対し、2,143㎡とやや狭い。この差480㎡の内容は書庫・事務室が狭いことである。ただし、大小の電動書架導入などの工夫を重ね、閲覧室は750㎡と私立医科大学平均値並の面積を確保し、利用者が快適に勉学できる環境となっている。

1階玄関に、BDS(退館管理)システムや図書目録箱、視聴覚資料、検索性ブースなどが集中し、狭くなっていたが、平成13年に視聴覚資料を2階へ移設し整理した。また、カウンター・事務室・整理室等の不要物が整理され、5年前から比べると改善されたことは評価できる。

2階には、個別グループ学習室が8室あり、IT化に対応して各部屋には32回線の光ケーブルが結ばれており、インターネット・イントラネットへ接続されている。8室のうち2室には、視聴覚設備が備え付けられており、種々のメディア再生が可能となっている。個別学習室の利用度は高く、定期試験・国家試験の参考用視聴覚室としても活用されている。

【長所と問題点】

閲覧室は2階吹き抜けの全面ガラス張り構造であることから、開放的で明るい雰囲気となっている。反面、この構造は2階部分の改装・増改築計画には対応できにくい。

他大学の図書館同様、毎年蔵書数が増えるため、書庫の狭隘化が問題となっている。数年前に利用頻度の少ない図書を別棟へ移管し、対応している。さらに図書館と各研究室・病院・研究所等は学内 LAN で綿密に連結されている。また、本学病院は全国の大規模病院に先駆けて電子カルテを導入し、図書館内へも光ケーブルで連結され、学習用に共用されている。

【将来の改善、改革に向けた方策】

平成11年度から利用度の少ない図書を別置き、本館の書架延長を確保したが、現状ではその書架も限界にきている。今後は電子ジャーナルの導入を推進し、書庫の狭隘化問題の改善、24時間対応図書館を目指し充実・発展に繋げたい。

平成17年2月に念願の新図書館システムが導入され、毎年強化改善を重ね、平成18年11月には第2回目のバージョンアップをおこなった。その結果、処理スピードと操作性が改善され、データがEXCELにダウンロードできることとなった為、各種統計処理がし易くなった。

試験的に実施していた24時までの開館延長は、一時的に学生の利用者数を増加させたが、学生の勉学環境スペースの別途確保や管理経費等を考慮し、本当に必要としている期間のみ開館延長することに落ち着いている。

研究者向けサービスについては、和洋の電子ジャーナルの導入と補完ツール(Web of Knowledge)を導入することにより、終日のサービスへと繋げたい。電子ジャーナルの導入については、初年度は和雑誌タイトル数550、洋雑誌タイトル数600、計1150を導入し、以降3年間で3,000タイトルの電子ジャーナル化を進めている。

全学の情報管理を統括して運営する機関を設け、その中に図書館機能を付加するいわゆる「医学情報センター構想」については、図書館独自で進められる構想でもないので残念ながら、未だ実現していないが、今後本学図書館が地域の大学と連携し学生教職員、患者、県民に開かれたものとなり、広く医学情報が提供できる場となるよう働きかけていく。

(2) 設備・備品の整備

【到達目標】

新図書館システムのバージョンアップを図りつつ、利用者の利便性向上を目指す。自動貸出システムや入館システム等基本設備の導入を具体的に検討していく。学生の利用頻度が高い2階のパソコンコーナーの4台は、旧式となったため、早急に機種を更新していく。

【現状の説明】

平成17年2月に新図書館情報システムが導入され、学術情報のより効率的な収集と提供が可能となった。またNACSIS-CATやNACSIS-ILLなど外部データベースとの接続により業務の効率化が図られた。なお、イントラHPから、文献検索や図書館間相互貸借の申し込

みもスムーズに行えるようになっている。

図書館が所有している主な機器は次のとおりである。

パソコン 18 台（内事務室内 10 台）、複写機 4 台、内カラー複写機 1 台、FAX 1 台、ビデオデッキ 2 台（DVD 対応）

なお、館内のスペース確保のため、平成 18 年には、旧式 Video、旧式スライド映写機等を処分した。

【点検・評価並びに長所と問題点】

自動入退館システムや自動貸出装置は、本館には未だ設置されていない。また、BDS（退館管理）システム・電動書架なども老朽化に伴い、故障がちであり、基本設備の更新が必要となっている。

Web による情報検索や電子ジャーナルの利用が本格化し、その環境も整える必要がある。平成 18 年度当初から図書館運営委員会を中心に、ワーキンググループを組織し、導入計画が検討され、平成 18 年度末から電子ジャーナル導入が実現していることは評価できる。初年度は和・洋雑誌合わせて約 1150 タイトルの E J 化が実現する運びである。

2 階に、インターネットに接続したパソコン端末が 4 台あり、グループ学習室 8 室には光ケーブル 32 回線がインターネットに接続可能であり、活用されている。

旧式 Video、旧式スライド映写機等は廃棄し整理したが、それに代わる液晶プロジェクター等新メディア対応の機器補充が必要となっている。

【将来の改善・改革に向けた方策】

将来的には、図書館情報システムをベースにした入退館チェックや、自動貸出しシステムなどを導入し、無人管理の実現をはかりたいとの点は、現時点では経費がかかるので実現していない。しかし新図書館システムの導入は、これらの入退館情報や、自動貸出情報との連結が可能となったので、今後積極的に導入を図れるよう努めていく。

学生閲覧室の座席数、開館時間、図書館ネットワークの整備等、図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性、適切性（A）

【到達目標】

座席数は、189 席で収容定員（学部学生・大学院生は）4.9 人に対し 1 席で充実している。

開館時間は平日 9:00-21:00、土曜日 9:00-17:00 であるが、試験期間中とその 2 週間前までは 2 時間延長し（平日 23:00 迄、土曜日は 19:00 迄）開館しており、その日数は総開館日の 3 割弱となっている。また、研究者に対しては平成 18 年度末から電子ジャーナルの導入を図り、24 時間フリーアクセスでの情報提供をしており、同タイトル数を以降 3 ヶ年計画で充実を図る。学生に対しては本学の特徴とする各種の図書コーナーの充実を図ることにより要望に応じている。

【現状の説明】

過去3年（H15～17年度）の入館者数は、漸減傾向が続いており、平成17年度実績では私立医科大学平均・全医大平均の45%程度である。平成13年頃、一時的に増加していた学生の利用者数（来館者数）も最近は漸減傾向で、教職員も同様の傾向にある。研究者においては、電子媒体が普及するにつれ情報利用形態も変化しつつあることから、来館して利用する人は減少しており、この傾向は今後も続くものと予想される。

また、利用にあたっては、「図書館の利用案内」を作成し、新入生オリエンテーションでの配布や図書館のホームページに掲載するなどして、効果的に利用できるよう配慮している。

【点検・評価並びに長所と問題点】

学生の試験期間を除き閲覧座席は十分足りている。試験期間中は利用者が急増し多少混雑するが、中2階のキャレルを最大限活用し座席の確保に努力している。また、2階のグループ学習室、通路の休憩室（31席）、1・2階パソコン検索コーナー（8席）などを加えると最大限活用した場合には、表43に報告してある座席数に39席を加えた228席となる。

(1) サービス対象者は教職員数約1.9千人で、私立医科大学平均の58%である。学生数は約0.9千人で、私立医科大学平均の61%である。

(2) 年間入館者数は約42千人で、絶対数は私立医科大学平均34%程度である。1日平均入館者数は約152人で、絶対数は私立医科大学平均の36%であり、サービス対象者数規模を勘案してもやや少ない数値である。

近年の利用者（来館者数）を見ると、学生・研究者共に減少傾向にある。図書館に足を運んで、書籍を見る、あるいは図書館で勉強をする時代から、各研究室・自習室等でインターネットを利用し、電子化情報を入手して事足りる時代に変化してきていると思われる。

(3) 年間館外貸出冊数は約3.2千冊で、私立医科大学平均よりかなり低い数値となっている。また、1日平均貸出人数は6.9人、1日平均貸出冊数は11.1冊で、私立医科大学・全医大平均よりかなり低い数値となっており、5年前と比較しても減少している。

(4) 複写件数は5,318件と、横ばい状態であり、私立医科大学平均の50%程度となっている。

(5) 本学所蔵図書・雑誌検索は、オンライン閲覧目録（OPAC）により可能である。データベースとしては「MEDLINE」や「医学中央雑誌」が頻繁に利用されている。これらは学内LANを通じて各教室の端末から自由に検索可能であり活用されている。また国立情報学研究所と接続されており、全国の大学の目録所在情報の利用及びILL（相互貸借）が可能となっている。さらに、日本医学図書館協会に加盟しており、全国の医学図書館と緊密な協力関係にある。

また、平成18年度末からは電子ジャーナルの導入を図り、洋雑誌のScience Direct、和雑誌のMedical Onlineなど約1,150タイトルが終日学内どこからでも見られるよう

になり、補完ツール（Web of Knowledge）を導入するなど積極的な研究サポート体制の基盤整理に着手していることは評価したい。（「大学基礎データ表 41」の電子ジャーナル 285 の数値は、H18.5.1 現在の数値である。）

【将来の改善・改革に向けた方策】

学生利用者数は漸減しており、貸出人数・貸出冊数・利用人数・利用冊数も共に低い数値となっている。これらはインターネットで必要な情報が簡単に入手できる環境の変化が影響していると考えている。このような環境の下でも、利用者のニーズを十分聴き、オリエンテーションや講習会を開催し、時代に応じた啓蒙活動に努め利用者増に向け努力する。

「学生指定図書コーナー」「国試コーナー」「PBL テュートリアルコーナー」は本学の教育を特徴づけるコーナーであり、教員と連携をとり、内容の見直しを図りつつ充実させるよう努めていく。また、“良医の育成”と学園生活を支援するために設置された「後輩に残す 1 冊・百選コーナー」、「学生生活支援室図書コーナー」は、本館の特徴でもあり充実維持していく。

座席数については、空きスペースを工夫し最大限確保している。

利用者サービスとしては、新図書館システムを導入し、バージョンアップを繰り返し、ニーズに応じた利便性の改善に努めている。またジャーナルの電子化は和洋雑誌とも計画的に増やす予定である。電子ジャーナルを補完するツール（Web of Knowledge）も導入され利便性の向上に努めている。国立情報学研究所との接続による全国大学図書館目録情報の利用システム及び相互貸借システム、日本医学図書館協会加盟による全国医学系図書館との協力関係も維持し、利用者のニーズに応じたサポート体制を充実させ、利用しやすい図書館作りを目指していく。

開館時間の延長は、現状のシステムを維持していくこととし、平成 17 年度においては年間 292 日開館し、約 90 日は平日 23 時まで開館している。

また、研究者向けサービスについては、電子ジャーナル等の導入により 24 時間開館対応としていく。

図書館の地域への開放の状況（A）

【到達目標】

日本医学図書館協議会等の動向を見ながら、完全に開放すべき状況になればその役割を担うべく、積極的に対応していく。

【現状の説明】

北陸 3 県の医療関係者（医師・看護師・コメディカル職員）、卒業生、本学役員及び教職員の紹介者には開放している。

【点検・評価並びに長所と問題点】

本学図書館は全館開架方式で運営しており、現状での一般市民への開放は、蔵書構成上から必ずしも適切かどうか検討の余地がある。

また日本医学図書館協議会でも、市民への医学情報提供は公共図書館がその役割を担うべきで、医学図書館特に私立大学の医学図書館がその役割を担うべきか検討中であり、その動向を見ながら進めたい。

なお、患者・見舞客等への医療情報の提供は、平成 18 年 11 月から本学病院図書室を病院新館 1 階に開設し、医学専門図書から闘病記・健康関連雑誌など約 3,000 冊及びパソコン 2 台により、各種の医療情報提供を実施している。

【将来の改善・改革に向けた方策】

日本医学図書館協議会等の動向を見ながら、積極的に対応していく。

2 学術情報へのアクセス

学術情報の処理・提供システムの整備状況、国内外の他大学との協力の状況（B）

（1）学術情報の処理・提供システムの整備状況

【到達目標】

新図書館システムは、機能的にも充実しており操作性が増し利便性の向上が図られた。国立情報学研究所や全国大学図書館及び米国国立医学図書館などの情報連結もされており必要な情報が、スムーズに入手可能となった。また平成 18 年度末から導入された電子ジャーナルは今後、計画的に充実させていく。各種のデータベースも充実を図っていく。今後は有効利用に資するため操作講習会を実施していく。

【現状の説明】

① データベース検索

医学文献データベースを中心とした情報検索サービスを提供している。

「医学中央雑誌 Web」、「MEDLINE」、「Web of Knowledge」、「Journal Citation Reports」、「Biological Abstracts」、「EBM Reviews」等のオンライン検索が可能となっている。

平成 18 年度末から導入された Web of Knowledge には、先行研究調査 DB ツールの Web of Science、Biological Abstracts、MEDLINE、投稿誌選定ツール、J C R Web、論文作成支援ツール End Note Web が付加されている。

多種多様な利用者の求めに応じて、専門のサーチャーが適切なアドバイスを実施している。しかし、有資格者サーチャーの不足に苦慮しているのが現状である。

② 電子ジャーナル

平成 18 年度には電子ジャーナル導入計画が検討され、以降 3 年乃至 5 年間で、段階的に導入されることが決定している。

平成 18 年度は、和雑誌については、若手研究者・病院コメディカル関係者に有用と考えられることから Medical Online 550 タイトルを導入し、洋雑誌については Science

Direct 600 タイトルを導入している。

電子ジャーナルの環境を補完する検索・論文作成支援ツール・J C R と連結したデータベースを備えた Web of Knowledge も並行導入している。これにより、利用者は 24 時間検索可能となり、タイトル数は順次増加させていく。

③ OPAC 検索

平成 17 年 2 月に新図書館システムが導入され、平成 18 年 11 月には OPAC の環境が大きく改善され、電子ジャーナルへの連結・NACSIS 目録ボタンの設置など他大学の所蔵状態が一覧でき、医学中央雑誌 Web から所蔵確認可能になるなど、操作性の向上に加えて、本学に所蔵していない資料の依頼（ILL）も容易となった。

その他の文献検索ツールも見易くなり、操作性が向上した。

④ 視聴覚資料等

ビデオ等視聴覚資料は図書館 2 階のグループ学習室の一角にあり、各種の各年代の再生が可能である。

【点検・評価並びに長所と問題点】

① データベース検索

「医学中央雑誌 Web」、「MEDLINE」、「Web of Knowledge」、「Journal Citation Reports」、「Biological Abstracts」、「EBM Reviews」等のオンライン検索が可能となっていること、及び Web of Knowledge が導入され、無制限フリーアクセスとなっていることは評価できる。

② 電子ジャーナル

平成 18 年度から電子ジャーナル化の導入計画がまとめられ、導入が実施されていることは評価できる。和雑誌 Medical Online の約 550 タイトル、洋雑誌 Science Direct の約 600 タイトルの電子化は評価できる。

問題点としては、経費の増加対策としての、冊子体特に 2 次資料の見直しが課題となる。また、電子ジャーナル管理の人材確保の点でも課題は残る。

③ OPAC 検索

以前の図書館システムの OPAC は、見難いうえ使い勝手が悪かった。

平成 17 年 2 月に導入された新図書館システム（LIMEDIO）は、OPAC の環境が大きく改善され、スピード・操作性も格段に向上した。更に本館の所蔵状況の確認のみならず、NACSIS 目録ボタンで他大学の所蔵状態も一目瞭然となった。医学中央雑誌 Web から所蔵確認ができるようになった。また電子ジャーナルへの連結、学生指定図書の情報も明確に判るように改善された。新着図書の案内、利用者からの情報交換が可能となっている。これら一連の改善は評価できる。

④ 視聴覚資料等

ビデオ等視聴覚資料点数は表 41 のとおり 1,064 点と、私立医大平均値（3,200）よりかなり少ない。インターネットや各種の無料電子媒体で情報検索が容易となった現状において、視聴覚資料を現状の予算で整備する必要があるか検討を要する。

【将来の改善・改革に向けた方策】

① データベース検索

「MEDLINE」、「医学中央雑誌 Web 版」、「EBM Reviews」等は継続して、維持管理していく。Web of Knowledge は、今後 3 ヶ年間はこの環境を維持、充実させていく。

② 電子ジャーナル

初年度（平成 18 年度はトライアル期間、平成 19 年度から本格導入）は、和雑誌 550 タイトル、洋雑誌 600 タイトル、計 1150 タイトルが導入されたが、以降 毎年約 1,000 タイトルを 3 ヶ年計画で計 3,000 タイトルまで電子化を推進していく予定である。

③ OPAC 検索

新図書館システムはバージョンアップを繰り返し、OPAC の環境も大幅に改善され、操作性も格段に向上した。医中誌 Web から所蔵確認、他大学の所蔵状態も一目瞭然となった。また、電子ジャーナル情報、学生指定図書情報も検索可能となった。新着図書のお知らせなど利便性は増している。今後は、付加されている機能を最大限に発揮できるように操作に習熟していかなければならない。

今後も時代の要求に応じたバージョンアップに心がけ、利用者の要求に応え充実・発展させていく。

④ 視聴覚資料等

ビデオ等視聴覚資料点数は、私立医大平均値より少ない。現状においては視聴覚資料の使用は少ない。インターネットの普及で各種の情報が無料で入手可能となった現状においては、積極的な予算投入は避ける。

（２）国内外の他大学との協力の状況

【到達目標】

全国の大学図書館や米国国立医学図書館などと連結されており、本館に無い資料は他館の所蔵情報が確認できるようになっており、資料の取り寄せは ILL システムにより入手が可能となっている。大学間の協力関係は緊密であり、この関係を維持していく。

【現状の説明】

① 医学図書館との協力関係

本図書館は、日本医学図書館協会、北信越地区医学図書館協議会に加盟しており、文献の相互貸借、医学図書館員の教育・研修等において、全国各地の医学図書館と緊密な協力関係にある。

また、日本国内にない資料も、日本医学図書館協会を通じ、NLM(National Library of Medicine/米国国立医学図書館)等から入手している。

② 他大学図書館との協力関係

国立情報学研究所と接続しており、その目録データベースにより全国の国公立大学の図書館資料を検索し、ILL システムを通じて学術文献情報を取り寄せている。また、

日本国内にない資料も、ILL システムを通じ、BLDSC(British Library Document Supply Centre／英国図書館文献供給センター)等から入手している。

＜ILL 処理件数(含む謝絶)の推移／平成 15 年度～平成 17 年度＞

	2003 年度 (H15)	2004 年度 (H16)	2005 年度 (H17)
貸(学外から本学へ依頼)	4,348 件	2,917 件	3,092 件
借(本学から学外へ依頼)	3,317 件	3,318 件	3,585 件
計	7,665 件	6,235 件	6,677 件

*ILL については、5 年前と比較すると貸借合せて総件数で約 20%減少しており、学外からの依頼受け件数は半減し、逆に本学からの依頼件数は、25%増加している。

③ 地域との協力関係

地域ネットワークとしては石川県大学図書館協議会に加盟しており、文献の相互貸借、研究者や学生等の閲覧利用において協定を結んでいる。なお、北陸三県の医療関係者には閲覧に限り開放している。

【点検・評価並びに長所と問題点】

① 医学図書館との協力関係

日本医学図書館協会のワーキンググループ等に参加する職員もおり、協力関係は良好である。総会、協議会、研修会等の参加において人的交流があり、メーリングリストを介して、情報照会、問題提起、自館で解決できないレファレンスの調査依頼等が気軽にできるメリットがある。また、洋雑誌の価格交渉、電子ジャーナルの契約など、多数の図書館が集うコンソーシアムに参加し、経済的メリットを享受している。

② 大学図書館との協力関係

国立情報学研究所と接続しており、共同分担目録、ILL 等において協力関係は緊密かつ良好である。とくに ILL においては、依頼を受けた場合の処理日数が、他大学より短いことは評価したい。なお、危惧していた ILL の処理業務量の増加については、2001 年 (H13) をピークに漸減しており、各大学において電子ジャーナル化が進んでいることが影響しているように思われる。しかし、今後も大学図書館間の相互貸借制度は欠かすことができないので協力関係を維持することは必要である。

国立情報学研究所と接続しているため、自館目録作成において良質な書誌情報が迅速に入手できたり、ILL において学術文献情報が迅速に入手できる等の利点がある。

③ 地域との協力関係

学術研究と医療に限って述べれば、協力関係は良好である。しかしながら、医学図書館という特殊性を考慮すると公立図書館との連携、一般住民への医学情報の提供という側面において、現段階では積極的には対応していない。図書館資料の学外者への貸出は、許可されていない。

なお、最近の動向として、病院図書室において患者向け・一般者向けの専門医学知識以外の情報、例えば闘病記などの情報提供が話題となっているが、本学病院においても

平成 18 年 11 月から病院図書室を設置してその部分を補っていることは評価できる。

【将来の改善・改革に向けた方策】

① 医学図書館との協力関係

医学図書館員の育成、専門機関(専門職)同士の情報交換という面において、今後も日本医学図書館協会を中心とした組織との協力関係を保持していく。また、本学図書館発の情報提供や協力活動にも積極性をもって取り組んでいく。

今後の電子ジャーナルの導入を推進する際にも、コンソーシアム契約が必要となり、綿密な情報交換をしつつ発展・充実させていく計画である。

② 大学図書館との協力関係

国立情報学研究所との接続を維持し、ILL や共同分担目録等において大学図書館間の協力関係を維持していく。電子ジャーナルの普及により ILL が減少傾向にあるとはいえ、今後も大学図書館間の相互貸借は欠かすことができないので、協力関係を維持していく。

③ 地域との協力関係

学術研究と医療に関しては、緊密な協力関係を持続していく。一般住民への医学情報公開については、今後、医学図書館を一般公開すべきとの社会的ニーズが高まってくれば、学内的なコンセンサスや利用の仕方に配慮したうえで検討していく。医学図書館の開放(医学専門知識の公開)は、全国医学図書館協議会の動向を見ながら対応を検討していく。